

第四期 羽二重終成時代

明治二十五年頃より羽二重の需用俄かに増加し商況漸く活気を呈し相場は日に月に上騰の一方に傾向し製造家の利潤甚だ多かりしより機業を熱望するも一時に現はれ當時福井市中に於て日々新調の織機は五拾台以上に昇り同年中に増加せし機數は實に八千四百台新たに本業に従事せしもの千六百三拾六名にして明治二十五年縣下の産出価額を前年に比するに十六割余加えたり然れども僅かに其數年前の状勢を顧みる時は未だ微々たる者にして明治頃が羽二重が創始の時代にあつては未だ羽二重が我縣下の特有物産となるべきや否やを豫知する者非ず僅にハンカチーフとして欧米に輸出したるに過ぎず即ち所謂端物にして今日の如く匹物として輸出するに至りしは明治廿四五年以来のことにして彼のメーソン商会出張店の手代田中金七（今の堀越出張店の支配人）が盛に各部を巡回して羽二重製造を奨励したるが如き又同商会が廿五碼を改めて五十碼となしたるが如き福井に於て紋縞羽二重を創始したるが如き羽二重市場の稍盛に起こりたるが如きも悉く明治廿四五年以来のことにして實に明治廿五年は羽二重の基礎を建造したるの年なり是余が此年を以て羽二重の終成時代の第一年とする所以なり

同年五月福井縣絹織物組合へ縣費壹千圓を補助し粗製濫造の弊を豫防せん為め羽二重の検査を行はしめ尚同年中同組合取締規則を發布し本則に依り更に同業組合を組織し組合規約を改め一層取締法を厳にせしめ検査法を更正して品位を上中下三等に區別し之に松竹梅の銘柄に対する証凜を転用して検査の証印を押捺することとなせり當時羽二重の検査を為した者は皿澤松太郎毛利政八鈴木利三郎の三人にして試験を受けて検査員となりし者は織田彦一岡嶋濱之助山田豊等なりしか検査の嚴重過くるを唱へて検査廃止説を主張する者多かりしと云う。

従来年に壹千圓なりし縣費補助は明治二十六より參千圓となし検査費として補助することとなれり此年北米合衆國シカゴ府に於て開設したる閣龍世界博覽会出品したる羽二重四百七拾參疋出品人參拾名にして内賞に預かりたる者拾四名なり同年今立郡栗田部外七ヶ所に福井羽二重検査所の出張所を設く

同年中羽二重の状況を考えふるに春來相當の価格を保ち販路亦渋滞の色をみず頗る好況なりしか三月以後之が原料たる生糸は外國為替相場下落の為めその価格非常に騰貴し而して羽二重の価格はこれに伴わず特に五月七月の如きはその不均衡最も著しく為に機業家は非常な困難を極め休業したもの少なからず即ち八月は同年産額最も少き月にして同月の産額壹萬九千余匹に低落せり

明治廿七年福井に染織傳習所を設く同年本縣出品者総代として去年閣龍博覽会に渡航したる谷村一佐該会閉場後帰朝の途次日耳義萬國博覽会に縣下産羽二重を出品し名誉賞状並びに金牌を授與されたり同年に至り羽二重の状況は漸次隆盛の域に進み

春来商況常に活発にして浮沈至って少なく其産額日に月に増加せり其原因素より一にして足らずと雖も畢竟製品の検査を密にし品質の改良を促し以て能く本県の声価を保ち以て海外需業者の嗜好に適するを得るに至りたる結果に外ならず

明治廿八年染色傳習所を拡張して染織学校と改め國庫より金千式百圓の補助を受け福井に本校を置き大野栗田部及武生に分教場を設置する四月福井羽二重検査所の出張所廃し縣下に産する羽二重は都て福井検査所に於いて検査し品位の區別を一層正確ならしむるの方針を取り遠隔不便の地にして一ヶ月壹千匹以上を産出する地方に限り臨時検査員を派して検査せしむることに改めたり

同年中羽二重は漸く隆旺に赴くの傾向あり六月以前に在ては原糸の価格騰貴し羽二重価格の之に伴はざるにも拘らず概してその産額を増加せしが六月以後に在つては糸価益々騰貴を来せしも製品は其影響を感じず依然低額を保ち収支相償はざるより産出高稍や減少するに至りたり

明治廿九年海外に於ける羽二重の商況を視察の爲め國庫より金四千圓の補助を受け欧米視察員として村野文次郎杉田定一の二名選拔せられて欧米に渡航す

同年中羽二重は倍々隆盛の域に進み一月以来漸次原糸価格の下落するにより機業家は其の買入ある生糸を早く織出し多額の産出をなして六月以後は原糸価格の騰貴に伴い羽二重価格の騰貴を見はし機業家は注文に応じ収支相當の利潤あるを以増製の際九月上旬における大洪水の爲に二三週間休業し加之運輸交通の便を杜塞せられたる爲め製品停滞し生糸を輸入せず自ら原料の不足を生じ一時大に困難を感じたり

明治三十年羽二重検査の派出所をさらに松岡森田の両所に設く一月中旬杉田村野の両視察員欧米より帰朝す而して觀察の結果直輸出の利益あるを認め小川喜三郎村野文次郎など有志相謀り五月中試売の爲め平地及び綾地羽二重五百匹計を佛独兩國に輸送したるに好果を奏したり同年染織学校の分教場を廃し其費用を以て各郡より入校する生徒学資の補助に充つ

同年中絹織物の状況は駸々として隆盛の域に進み特に羽二重の如きは原糸の騰貴に伴い漸次上向きになりしにより機業家は注文に応じ収支相當の利潤あるを以て着々時好に応ずるの改良を計るに至れり

明治三十一年日本絹輸出株式会社設立の計畫をなし同年四月發起人において同会社設立の認可を得て第一回株金募集に着手せしも當時恰も諸物価騰貴金融逼迫など種々の情實に制せられ払込上不結果を来せしにより一時これを中止して時期の到来するを待つこととせり絹織物組合の団体は輸出重要品同業組合法によりさらにこれを組織せるにより同年九月三十日限絹織物組合取締規則を廃止せり依て旧組合は同日限り解散し新組合は翌十月一日より成立せり

同年中羽二重は駸々として隆盛の域に進み近年益欧米人の嗜好に適し年々販路拡張したるも春期に於て原糸の価格昂騰し得失償はざるより製造を躊躇する傾向を呈せる折柄米西兩國葛藤の爲め其影響は製品に及ぼし俄然価格の低落を見るに至り一時産出高を減少せしも七月以降に至り米西協和の結果注文の多さにより順つて産出品も増加し爲に曩に衰頽を来せしを快復し一層の好況を呈したり

明治三十二年伊國コモ市に於て開設すべき製絹業博覧会の開会を機とし國庫の補助を以て伊佛兩國製絹業の實況視察のため諸新平福井県絹織物同業組合より推薦せられ彼地へ渡航す一月岡田源吉米國へ高島篤治清國へ同十二月中林庄一佛國へ各實業練習生として渡航せり又同年六月中絹織物商況視察員として松原栄露韓兩國へ出張す。

同年中羽二重の状況は駸々として隆盛の域に進み前年冬季より順調に向かい漸次産額も増進し来りしが五月下旬より市場稍沈静に傾きしも七八月の交に至り商勢再び加わりし以来益活気を帯び九、十、十一の三ヶ月間は外國市場の注文非常の多きにより順つて製産高も増加しその取引頻繁を告げ相場は自然昂騰し市況愈活発となり本年中の総生産が百式拾参萬八千四百六拾五匹千八百本式千百式拾打にして此価格千四百八拾七萬八千九百八拾九圓（内羽二重百四萬八千四百五拾七匹にして此価格千参百七拾八萬八千式百四拾八圓）の多さに達す實に斯業創始以来未曾有の好況を呈し機業家は競うて羽二重を算出せり斯くの如き価格暴騰の結果終に其反動を來たし十一月末日より爾來商勢挫折し相場は漸次低下の一方に傾向せり

明治三十三年佛國巴里市に開かれたる世界博覧会本県出品人総代として山村貞輔近藤善助松井文太郎山口彌壽郎松原栄の五名佛國に渡航し各帰途東西各國を巡視し各國絹業の状況を調査す又同年杉田定一農商務省及本縣絹織物の囑託員として欧米諸國の企業地を巡視同年我縣企業家は福井縣絹織物同業組合の名義を以て羽二重外諸種の絹織物参百十六匹式拾五打を巴里萬國博覧会に出品す

同年中絹織物の状況は頗る不良にして前年に比し著しく數量並びに価額を減ぜり是れ前年暴騰後頓に下落し品不揃いの為め工業界の恐慌甚だしく為に機業家に幾多の破産者を出し一時は事業を縮小するもののあり或いは全く中止するものありたり今三十二年、三三年兩年羽二重相場暴騰暴落の度を比較するにおよそ左表に示すが如し

同 年 九 月	同 年 八 月	同 年 七 月	同 年 六 月	同 年 五 月	同 年 四 月	同 年 三 月	同 年 二 月	明 治 卅 三 年 一 月	同 年 十 二 月	同 年 十 一 月	同 年 十 月	明 治 卅 二 年 九 月		
													10,500	明 治 卅 三 年 羽 二 重 (目 方 百 笈) 價 額 高 低 表
													10,000	
													9,500	
													9,000	
													8,500	
													8,000	

同年大久保鏝彌福井県絹織物同業組合長に推薦せられ今日尚その職にあり將にこの章を終わらんとするに当たりて附記せざる可らざるあり曰く生糸羽二重取引組織の沿革曰く練白業機具及其附属品の沿革是なり固より紙數に限りあるを以て僅に其の
大要を記さん

以下引き続き掲載予定

取引組織の沿革

練白業の沿革

機具の沿革